ちほの
おしゃべりタイム

新年によせて

オフィスPrima 代表
フリーアナウンサー
ビジネスマナー講師
透（とおる） 千保（ちほ）

東海地方の各放送局（岐阜放送/ぎふチャン、FM GIFU、東海ラジオ、メ～テレなど）で数多くの番組やニュースを担当。司会、ナレーションの他、名鉄電車、名古屋市営地下鉄など、公共交通機関のアナウンス放送に携わる。
一方、企業・大学において、ビジネスマナー、電話応対などの研修講師を務め、人財育成に取り組んでいる。

一年の計は元旦にあり。新しい年を迎えて、今年の目標や実現したいことを思い描いた方もいらっしゃることでしょう。

先頃、TACT経営研究会の皆様と二宮金次郎（尊徳）の思想を今に伝える大日本報徳社を訪れました。金次郎は、江戸時代後期の1787年に現在の小田原市栢山（かやま）に生まれ、貧しい中で勤労に励み、独学で見識を磨くと、私財を投げ打って全国各地の600もの農村の救済に手腕を発揮しました。

その考え方は「報徳思想」と呼ばれ、①至誠＝まごころ、②勤労＝勤勉、③分度＝適度、④推譲＝感謝して譲ることを柱とし、徳（長所、価値）を活かして自立し社会のために貢献することを説いています。すなわち、自分も他人も幸せになり、社会も豊かになることを目指しているのです。

報徳思想は明治期の経済界にも浸透し、渋沢栄一などの経済人たちに多大な影響を与えました。渋沢栄一はNHKの大河ドラマが記憶に新しいところですが、著書『論語と算盤』で「私利私欲より多くの人々の役に立つ公利公益を大切にしたい」と述べ、500社以上の企業に関わって日本の近代化に大きな貢献を為しました。また渋沢は東京商法会議所を設立しましたが、これは私たちも所属している現在の商工会議所の礎となりました。

二宮金次郎の七代目子孫に当たる中桐万里子さんによると、薪を背負い読書をする金次郎の銅像は、優等生を目指しているのではなく、どんな時もくじけず、諦めず、前に進むこと。小さく足が一歩前に出ていることに意味があるそうです。

金次郎は「徳をもって徳に報いる」とも説きましたが、自分が生かされていることに感謝し、その恩を次代（子孫、地域）に送って行くという考え方です。幸せはゴールにあるのではなく足元にある。今ここに存在していることが尊いことであり、頑張っているのは自分だけではないのだから周囲の人に応えようと立ち上がること。人は他者とのつながりの中で生きており、誰かのために役に立つことで幸福感を得られるということも教えられました。

困難な今を乗り越えて、私たちが向かうのはどのような未来でしょうか。おそらくそこでは、極端な利己主義や利益第一主義ではなく、新しい「公（パブリック）」のあり方が模索されるのだと思います。大日本報徳社の正門は、道徳門・経済門という文字が刻まれた左右の門柱が鉄製アーチでつながれ、道徳と経済の調和を示しています。この門が表すように、未来は物心ともに豊かな社会であってほしいものです。

二宮金次郎は、昭和21年発行の１円札の肖像にも使われていますが、令和６年度から、渋沢栄一が1万円札の肖像になる予定です。先人からのメッセージが、時を超えてつながっているような気がしました。